

テーマ：〈モーツァルトのピアノの世界〉

ーモーツァルトをどう聴くか、またどう弾くか、
私からのサジェスチョンー



講師：海老澤 敏

東京大学大学院人文科学研究科美学専攻修士課程修了。仏政府給費留学生として滞仏。文化功労者。現在、日本モーツァルト研究所所長、ザルツブルクモツァルターウム財団名誉財団員・モーツァルト研究所所員、ポローニャ王立音楽アカデミー名誉会員、尚美学園大学大学院名誉教授、国立音楽大学名誉教授。元国立音楽大学学長・理事長・学園長、新国立劇場前副理事長・オペラ研修所元所長。紫綬褒章、オーストリア共和国有功勳章学術芸術第一等十字章、仏政府芸術文化勳章オフィシエ他受章多数。モーツァルト、ルソーに関する著書・訳書多数。

要旨

私はピアニストじゃありませんし、作曲家でもなく、今でもひたすら、モーツァルトの生涯と音楽を尋ね、その運命と響きに思いを凝らす一介の研究者です。

モーツァルトは当時の鍵盤楽器のひとつチェンバロ（ハープシコード）で3、4歳の幼時から鍵盤に慣れ親しみ、またきわめて単純な曲づくりと始め、長じてフォルテピアノなる楽器を中心として、古典派時代のクラヴィア楽器とその音楽すべての発展段階を体験し、そしてまさにもっとも典型的、代表的作品を書き残し、それらは今日でもなおピアニスト達によって演奏され続けています。

ただ現代ピアノという後世の新しい楽器で、そうしたモーツァルトの作品を弾きこなすのは、実は案外むずかしいかも知れません。

その理由を取って何点か指摘し、その上で現代ピアノでのよりよい演奏が可能と思われる私案を提示してみたいと思います。

私にとっても、現代ピアノでの素敵な演奏が聴きたくて仕方がないのですから。